

銀河鉄道の夜

宮沢賢治

青空文庫

一、午後の授業

「ではみなさんは、さういふふうに川だと云はれたり、乳の流れたあとだと云はれたりしてゐたこのぼんやりと白いものがほんたうは何かご承知ですか。」先生は、黒板に吊した大きな黒い星座の図の、上から下へ白くけぶつた銀河帯のやうなところを指しながら、みんなに問をかけました。

カムパネルラが手をあげました。それから四五人手をあげました。ジョバンニも手をあげやうとして、急いでそのまゝやめました。たしかにあれがみんな星だと、いつか雑誌で読んだのですが、

このごろはジョバンニはまるで毎日教室でもねむく、本を読むひまも読む本もないので、なんだかどんなこともよくわからないといふ気持ちができるのでした。

ところが先生は早くもそれを見附けたのでした。

「ジョバンニさん。あなたはわかつてゐるのでせう。」

ジョバンニは勢よく立ちあがりましたが、立って見るともうはつきりとそれを答へることができないのでした。ザネリが前の席からふりかへって、ジョバンニを見てくすつとわらひました。ジョバンニはもうどぎまぎしてまつ赤になつてしまひました。先生がまた云ひました。

「大きな望遠鏡で銀河をよつく調べると銀河は大体何でせう。」

やっぱり星だとジョバンニは思ひましたがこんどもすぐに答へることができませんでした。

先生はしばらく困ったやうすでしたが、眼をカムパネルラの方へ向けて、「ではカムパネルラさん。」と名指しました。するとあんなに元気に手をあげたカムパネルラが、やはりもぢもぢ立ち上ったまゝやはり答へができませんでした。

先生は意外なやうにしばらくちつとカムパネルラを見てみました。が、急いで「では。よし。」と云ひながら、自分で星図を指しました。

「このぼんやりと白い銀河を大きないゝ望遠鏡で見ますと、もうたくさんの小さな星に見えるのです。ジョバンニさんさうでせう

。　　
「　　」
ジョバンニはまっ赤になつてうなづきました。けれどもいつかジ
ヨバンニの眼のなかには涙がいつぱいになりました。さうだ僕は
知つてゐたのだ、勿論カムパネルラも知つてゐる、それはいつか
カムパネルラのお父さんの博士のうちでカムパネルラといつしよ
に読んだ雑誌のなかにあつたのだ。それどこでなくカムパネルラ
は、その雑誌を読むと、すぐお父さんの書「齋」から巨きな本を
もつてきて、ぎんがといふところをひろげ、まっ黒な頁いつぱい
に白い点々のある美しい写真を二人でいつまでも見たのでした。
それをカムパネルラが忘れる筈もなかつたのに、すぐに返事をし
なかつたのは、このごろぼくが、朝にも午后にも仕事がつらく、

学校に出てももうみんなともはきはき遊ばず、カムパネルラともあんまり物を云はないやうになつたので、カムパネルラがそれを知つて気の毒がつてわざと返事をしなかつたのだ、さう考へるとたまらないほど、じぶんもカムパネルラもあはれなやうな気がするのでした。

先生はまた云ひました。

「ですからもしもこの天の川がほんたうに川だと考へるなら、その一つ一つの小さな星はみんなその川のそこの砂や砂利の粒にもあたるわけです。またこれを巨きな乳の流れと考へるならもつと天の川とよく似てゐます。つまりその星はみな、乳のなかにまるで細かにうかんでゐる脂油の球にもあたるのです。そんなら何が

その川の水にあたるかと云ひますと、それは真空といふ光をある速さで伝へるもので、太陽や地球もやっぱりそのなかに浮んでゐるのです。つまりは私どもも天の川の水のなかに棲んでゐるわけです。そしてその天の川の水のなかから四方を見ると、ちやうど水が深いほど青く見えるやうに、天の川の底の深く遠いところほど星がたくさん集つて見えしたが、白くぼんやり見えるのです。この模型をごらん下さい。」

先生は中にたくさん光る砂のつぶの入つた大きな両面の凸レンズを指しました。

「天の川の形はちやうどこんななのです。このいちいちの光るつぶがみんな私どもの太陽と同じやうにじぶんで光つてゐる星だと

考へます。私どもの太陽がこのほゞ中ごろにあつて地球がそのすぐ近くにあるとします。みなさんは夜にこのまん中に立つてこのレンズの中を見まはすとしてごらんなさい。こつちの方はレンズが薄いのでわづかの光る粒即ち星しか見えないのでせう。こつちやこつちの方はガラスが厚いので、光る粒即ち星がたくさん見えその遠いのはぼうつと白く見えるといふこれがつまり今日の銀河の説なのです。そんならこのレンズの大きさがどれ位あるかまた「」その中のさまざまの星についてはもう時間ですからこの次の理科の時間にお話します。では今日はその銀河のお祭なのですからみなさんは外へでてよくそらをごらんなさい。ではこゝまでです。本やノートをおしまひなさい。」

そして教室中はしばらく机の蓋をあけたりしめたり本を重ねたりする音がいつぱいでしたがまもなくみんなはきちんと立って礼をする。すると教室を出ました。

〔二一〕 活版所

ジョバンニが学校の門を出るとき、同じ組の七八人は家へ帰らずカムパネルラをまん中にして校庭の隅の桜の木のところを集まってみました。それはこんやの星祭に青いあかりをこしらえて川へ流す烏瓜を取りに行く相談らしかったのです。

けれどもジョバンニは手を大きく振ってどしどし学校の門を出て

来ました。すると町「の」家々ではこんやの銀河の祭りにいちむの葉の玉をつるしたりひのきの枝にあかりをつけたりいろいろ仕度をしてゐるのです。

家へは帰らずジヨバンニが町を三つ曲つてある大きな活版処にはいつてすぐ入口の計算台「に居ただぶだぶの白いシャツを着た人に」おじぎをしてジヨバンニは靴をぬいで上りますと、突き当りの大きな扉をあけました。中にはまだ昼なのに電燈がついてたくさんの「輪」転器がばたりばたりとまはり、きれで頭をしぼったりラムプシエードをかけたたりした人たちが、何か歌ふやうに読んだり数へたりしながらたくさん働いて居りました。

ジヨバンニはすぐ入口から三番目の高い卓子に座った人の所へ行

つておじぎをしました。その人はしばらく棚をさがしてから、

「これだけ拾って行けるかね。」と云ひながら、一枚の紙切れを渡しました。ジヨバンニはその人の卓子の足もとから一つの小さな平たい函をとりだして向ふの電燈のたくさんついた、たてかけてある壁の隅の所へしやがみ込むと小さなピンセットでまるで粟粒ぐらゐの活字を次から次と拾ひはじめました。青い胸あてをした人がジヨバンニのうしろを通りながら、

「よう、虫めがね君、お早う。」と云ひますと、近くの四五人の人たちが声もたてずこつちも向かずに冷くわらひました。

ジヨバンニは何べんも眼を拭ひながら活字をだんだんひろひました。

六時がうってしばらくたつたころ、ジョバンニは拾った活字をいっぱいに入れた平たい箱をもういちど手にもった紙きれと引き合せてから、さっきの卓子の人へ持って来ました。その人は黙ってそれを受け取って微かにうなづきました。

ジョバンニはおじぎをすると扉をあけてさっきの計算台のところに来ました。するとさっきの白服を着た人がやつぱりだまって小さな銀貨を一つジョバンニに渡しました。ジョバンニは俄かに顔いろがよくなって威勢よくおじぎをすると台の下に置いた鞆をもつておもてへ飛びだしました。それから元気よく口笛を吹きながらパン屋へ寄ってパンの塊を一つと角砂糖を一袋買ひますと一目散に走りだしました。

三、家、

ジヨバンニが勢よく帰って来たのは、ある裏町の小さな家でした。その三つならんだ入口の一番左側には空箱に紫いろのケールやアスパラガスが植えてあつて小さな二つの窓には日覆ひが下りたまゝになつてゐました。

「お母さん。いま帰つたよ。工合悪くなかつたの。」ジヨバンニは靴をぬぎながら云ひました。

「あゝ、ジヨバンニ、お仕事がひどかつたらう。今日は涼しくてね。わたしはずうっと工合がいゝよ。」

ジヨバンニは玄関を上って行きますとジヨバンニのお母さんがすぐ入口の室に白い巾を被つて寝んでゐたのでした。ジヨバンニは窓をあけました。

「お母さん。今日は角砂糖を買ってきたよ。牛乳に入れてあげやうと思つて。」

「あゝ、お前さきにおあがり。あたしはまだほしくないんだから。」

「お母さん。姉さんはいつ帰つたの。」

「あゝ三時ころ帰つたよ。みんなそこらをしてきてね。」

「お母さんの牛乳は来てゐないんだらうか。」

「来なかつたらうかねえ。」

「ぼく行ってとつて来やう。」

「あゝあたしはゆつくりでいゝんだからお前さきにおあがり、姉さんがね、トマトで何かこしらえてそこへ置いて行つたよ。」

「ではぼくたべやう。」

ジヨバンニは窓のところからトマトの皿をとつてパンといつしよにしばらくむしやむしやたべました。

「ねえお母さん。ぼくお父さんはきつと間もなく帰つてくると思ふよ。」

「あゝあたしもさう思ふ。けれどもおまへはどうしてさう思ふの。」

「だって今朝の新聞に今年は北の方の漁は大へんよかつたと書い

てあつたよ。」

「あゝ、だけどねえ、お父さんは漁へ出てゐないかもしれない。」

「きつと出てゐるよ。お父さんが監獄へ入るやうなそんな悪いことをした筈がないんだ。この前お父さんが持つてきて学校へ寄贈した巨きな蟹の甲らだのとなかひの角だの今だつてみんな標本室にあるんだ。六年生なんか授業のとき先生がかはるがはる教室へ持つて行くよ。一昨年修学旅行で〔以下数字文字分空白〕」

「お父さんはこの次はおまへにラッコの上着をもつてくるといったねえ。」

「みんながぼくにあふとそれを云ふよ。ひやかすやうに云ふんだ

。」

「おまへに悪口を云ふの。」

「うん、けれどもカムパネルラなんか決して云はない。カムパネルラはみんながそんなことを云ふときは気の毒さうにしてゐるよ。」

「あの人はうちのお父さんとはちやうどおまへたちのやうに小さいときからのお友達だったさうだよ。」

「あゝだからお父さんはぼくをつれてカムパネルラのうちへもつれて行つたよ。あのころはよかつたなあ。ぼくは学校から帰る途中たびたびカムパネルラのうちに寄つた。カムパネルラのうちにはアルコーランプで走る汽車があつたんだ。レールを七つ組み合せると円くなってそれに電柱や信号標もついてゐて信号標のあ

かりは汽車が通るときだけ青くなるやうになつてゐたんだ。いつかアルコールがなくなつたとき石油をつかつたら、缶がすっかり煤けたよ。」

「さうかねえ。」

「いまも毎朝新聞をまはしに行くよ。けれどもいつでも家中まだしいんとしてゐるからな。」

「早いからねえ。」

「ザウエルといふ犬があるよ。しつぽがまるで箒のやうだ。ぼくが行くと鼻を鳴らしてついてくるよ。ずうつと町の角までついてくる。もつとついてくることもあるよ。今夜はみんなで烏瓜のあかりを川へながしに行くんだって。きっと犬もついて行くよ。」

「さうだ。今晚は銀河のお祭だねえ。」

「うん。ぼく牛乳をとりながら見てくるよ。」

「あゝ行っておいで。〔川へははいらないでね。〕」

「あゝぼく岸から見ただけなんだ。一時間で行つてくるよ。」

「もつと遊んでおいで。カムパネルラさんと一諸なら心配はないから。」

「あゝきつと一諸だよ。お母さん、窓をしめて置かうか。」

「あゝ、どうか。もう涼しいからね」

ジヨバンニは立つて窓をしめお皿やパンの袋を片附けると勢よく靴をはいて

「では一時間半で帰ってくるよ。」と云ひながら暗い戸口を出ま

した。

〔四、〕ケンタウル祭の夜

ジヨバンニは、口笛を吹いてゐるやうなさびしい口付きで、檜のまつ黒にならんだ町の坂を下りて来たのでした。

坂の下に大きな一つの街燈が、青白く立派に光つて立つてゐました。ジヨバンニが、どんどん電燈の方へ下りて行きますと、いままでばけもののやうに、長くぼんやり、うしろへ引いてゐたジヨバンニの影ばうしは、だんだん濃く黒くはつきりなつて、足をあげたり手を振ったり、ジヨバンニの横の方へまはつて来るので

した。

（ぼくは立派な機関車だ。ここは勾配だから速いぞ。ぼくはいまその電燈を通り越す。そうら、こんどはぼくの影法師はコムパスだ。あんなにくるつとまはつて、前の方へ来た。）

とジョバンニが思ひながら、大股にその街燈の下を通り過ぎたとき、いきなりひるまのザネリが、新らしいえりの尖ったシャツを着て電燈の向ふ側の暗い小路から出て来て、ひらつとジョバンニとすれちがひました。

「ザネリ、烏瓜ながしに行くの。」ジョバンニがまださう云つてしまはないうちに、

「ジョバンニ、お父さんから、らつこの上着が来るよ。」その子

が投げつけるやうにうしろから叫びました。

ジョバンニは、ぱつと胸がつめたくなり、そこから中きいんと鳴るやうに思ひました。

「何だい。ザネリ。」とジョバンニは高く叫び返しましたがもうザネリは向ふのひばの植った家の中へはいってゐました。

「ザネリはどうしてぼくがなんにもしないのにあんなことを云ふのだらう。走るときはまるで鼠のやうなくせに。ぼくがなんにもしないのにあんなことを云ふのはザネリがばかなからだ。」

ジョバンニは、せはしくいろいろのことを考へながら、さまざまの灯や木の枝で、すっかりきれいに飾られた街を通つて行きました。時計屋の店には明るくネオン燈がついて、一秒ごとに石で

こさえたふくらふの赤い眼が、くるつくるとうごいたり、いろいろな宝石が海のやうな色をした厚い硝子の盤に載つて星のやうにゆつくり循つたり、また向ふ側から、銅の人馬がゆつくりこつちへまはつて来たりするのでした。そのまん中に円い黒い星座早見が青いアスパラガスの葉で飾つてありました。

ジヨバンニはわれを忘れて、その星座の図に見入りました。

それはひる学校で見たあの図よりはずうつと小さかったのですがその日と時間に合せて盤をまはすと、そのとき出てゐるそらがそのまゝ、「楕」円形のなかにめぐつてあらはれるやうになつて居りやはりそのまん中には上から下へかけて銀河がぼうとけむつたやうな帯になつてその下の方ではかすかに爆発して湯気でもあげて

みるやうに見えるのでした。またそのうしろには三本の脚のついた小さな望遠鏡が黄いろに光つて立つてゐましたしいちばんうしろの壁には空ぢ「ゆ」うの星座をふしぎな獣や蛇や魚や瓶の形に書いた大きな図がかかつてゐました。ほんたうにこんなやうな蝎だの勇士だのそらにぎつしり居るだらうか、あゝぼくはその中をどこまでも歩いて見たいと思つてたりしてしばらくぼんやり立つて居ました。

それから俄かにお母さんの牛乳のことを思ひだしてジョバンニはその店をはなれました。そしてきうくつな上着の肩を気にしながらそれでもわざと胸を張つて大きく手を振つて町を通つて行きました。

空気は澄みきって、まるで水のやうに通りや店の中を流れましたし、街燈はみなまつ青なもみや櫛の枝で包まれ、電気会社の前の六本のプラタヌスの木などは、中に沢山の豆電燈がついて、ほんたうにそこらは人魚の都のやうに見えるのでした。子どもらは、みんな新らしい折のついた着物を着て、星めぐりの口笛を吹いたり、

「ケンタウルス、露をふらせ。」と叫んで走ったり、青いマグネシヤの花火を燃したりして、たのしさうに遊んでゐるのでした。けれどもジョバンニは、いつかまた深く首を垂れて、そこらのにぎやかさとはまるでちがったことを考へながら、牛乳屋の方へ「急ぐのでした。」

ジヨバンニは、いつか町はづれのポプラの木が幾本も幾本も、高く星ぞらに浮んであるところに来てゐました。その牛乳屋の黒い門を入り、牛の匂のするうすくらい台所の前に立って、ジヨバンニは帽子をぬいで「今晚は、」と云ひましたら、家の中はいいんとして誰も居たやうではありませんでした。

「今晚は、ごめんなさい。」ジヨバンニはまつすぐに立つてまた叫びました。するとしばらくたつてから、年老つた女の人が、どこか工合が悪いやうにそろそろと出て来て何か用かと口の中で云ひました。

「あの、今日、牛乳が僕とこへ来なかつたので、貰ひにあがつたんです。」ジヨバンニが一生けん命勢よく云ひました。

「いま誰もゐないでわかりません。あしたにして下さい。」

その人は、赤い眼の下のところを擦りながら、ジヨバンニを見おろして云ひました。

「おつかさんが病気なんですから今晚でないと困るんです。」

「ではもう少ししたってから来てください。」その人はもう行つてしまひさうでした。

「さうですか。ではありがたう。」ジヨバンニは、お辞儀をして台所から出ました。

十字になった町のかどを、まがらうとしましたら、向ふの橋へ行く方の雑貨店の前で、黒い影やぼんやり白いシャツが入り乱れて、六七人の生徒らが、口笛を吹いたり笑ったりして、めいめい

烏瓜の燈火を持ってやって来るのを見ました。その笑ひ声も口笛も、みんな聞きおぼえのあるものでした。ジョバンニの同級の子供らだったのです。ジョバンニは思はずどきつとして戻らうとしましたが、思ひ直して、一さう勢よくそっちへ歩いて行きました。「川へ行くの。」ジョバンニが云はうとして、少しのどがつまつたやうに思つたとき、

「ジョバンニ、らつこの上着が来るよ。」さつきのザネリがまた叫びました。

「ジョバンニ、らつこの上着が来るよ。」すぐみんなが、続いて叫びました。ジョバンニはまつ赤になつて、もう歩いてゐるかもわからず、急いで行きすぎやうとしましたら、そのなかにカムパ

ネルラが居たのです。カムパネルラは気の毒さうに、だまって少しわらつて、怒らないだらうかといふやうにジョバンニの方を見てゐました。

ジョバンニは、遁げるやうにその眼を避け、そしてカムパネルラのせいの高いかたちが過ぎて行つて間もなく、みんなはてんで口笛を吹きました。町かどを曲るとき、ふりかへつて見ましたら、ザネリがやはりふりかへつて見てゐました。そしてカムパネルラもまた、高く口笛を吹いて向ふにぼんやり橋の方へ歩いて行つてしまつたのでした。ジョバンニは、なんとも云へずさびしくなつて、いきなり走り出しました。すると耳に手をあてゝ、わああと云ひながら片足でぴよんぴよん跳んでゐた小さな子供らは、

ジヨバンニが面白くてかけるのだと思つてわあいと叫びました。まもなくジヨバンニは□黒い丘の方へ急ぎました。

〔五〕 天気輪の柱

牧場のうしろはゆるい丘になつて、その黒い平らな頂上は、北の大熊星の下に、ぼんやりふだんよりも低く連つて見えました。

ジヨバンニは、もう露の降りかかった小さな林のこみちを、どんだんのぼつて行きました。まつくらな草や、いろいろな形に見えるやぶのしげみの間を、その小さなみちが、一すじ白く星あかりに照らしだされてあつたのです。草の中には、ぴかぴか青びか

りを出す小さな虫もゐて、ある葉は青く「すかし出され、ジョバンニは、さつきみんなの持つて行つた烏瓜のあかりのやうだとも思ひました。

そのまつ黒な、松や檜の林を越えると、俄かにがらんと空がひらけて、天の川がしらしらと南から北へ亘つてゐるのが見え、また頂の、天気輪の柱も見わけられたのでした。つりがねさうか野ぎくかの花が、そこらいちめん、夢の中からも薫りだしたといふやうに咲き、鳥が一疋、丘の上を鳴き続けながら通つて行きました。

ジョバンニは、頂の天気輪の柱の下に来て、どかどかするからだを、つめたい草に投げました。

町の灯は、暗の中をまるで海の底のお宮のけしきのやうにとり、子供らの歌ふ声や口笛、きれぎれの叫び声もかすかに聞えて来るのでした。風が遠くで鳴り、丘の草もしづかにそよぎ、ジョバンニの汗でぬれたシャツもつめたく冷されました。ジョバンニは町のはづれから遠く黒くひろがった野原を見わたしました。

そこから汽車の音が聞えてきました。その小さな列車の窓は一列小さく赤く見え、その中にはたくさんの旅人が、苹果を剥いたり、わらったり、いろいろな風にしてゐると考へますと、ジョバンニは、もう何とも云へずかなしくなつて、また眼をそらに挙げました。

あゝあの白いそらの帯がみんな星「だ」といふぞ「。」

ところがいくら見てゐても、そのそらはひる先生の云つたやうな、がらんとした冷いところだとは思はれませんでした。それどころでなく、見れば見るほど、そこは小さな林や牧場やある野原のやうに考へられて仕方なかつたのです。そしてジヨバンニは青い琴の星が、三つにも四つにもなつて、ちらちら瞬き、脚が何べんも出たり引つ込んだりして、たうたう蕈のやうに長く延びるのを見ました。またすぐ眼の下のまちまでがやつぱりぼんやりしたたくさん星の集りか一つの大きなけむりかのやうに見えるやうに思ひました。

〔六、〕 銀河ステーション

そしてジヨバンニはすぐうしろの天気輪の柱がいつかぼんやりした三角標の形になって、しばらく蛍のやうに、ペかペか消えたりともったりしてゐるのを見ました。それはだんだんはつきりして、たうたうりんとうごかないやうになり、濃い鋼青のそらの野原にたちました。いま新らしく灼いたばかりの青い鋼の板のやうな、そらの野原に、まつすぐにすきつと立つたのです。

するとどこかで、ふしぎな声が、銀河ステーション、銀河ステーションと云ふ声がしたと思ふといきなり眼の前が、ぱっと明るくなって、まるで億万の蛍鳥賊の火を一ぺんに化石させて、そら中に沈めたといふ工合、またダイヤモンド会社で、ねだんが

やすくならないために、わざと穫れないふりをして、かくして置いた金剛石を、誰かがいきなりひっくりかへして、ばら撒いたといふ風に、眼の前がさあつと明るくなって、ジヨバンニは、思はず何べんも眼を擦ってしまひました。

気がついてみると、さつきから、ごとごとごとごと、ジヨバンニの乗つてゐる小さな列車が走りつづけてゐたのでした。ほんたうにジヨバンニは、夜の軽便鉄道の、小さな黄いろの電燈のならんだ車室に、窓から外を見ながら座つてゐたのです。車室の中は、青い天蚕絨を張つた腰掛けが、まるでがら明きで、向ふの鼠いろのワニスを塗つた壁には、真鍮の大きなぼたんが二つ光つてゐるのでした。

すぐ前の席に、ぬれたやうにまっ黒な上着を着た、せいの高い子供が、窓から頭を出して外を見てゐるのに気が付きました。そしてそのこどもの肩のあたりが、どうも見たことのあるやうな気がして、さう思ふと、もうどうしても誰だかわかりたくて、たまらなくなりました。いきなりこつちも窓から顔を出さうとしたとき、俄かにその子供が頭を引つ込めて、こつちを見ました。

それはカムパネルラだったので。

ジョバンニが、カムパネルラ、きみは前からこゝに居たのと云はうと〔〕思つたとき、カムパネルラが

「みんなはねずるぶん走つたけれども遅れてしまつたよ。ザネリもね、ずるぶん走つたけれども追ひつかかなかつた。」と云ひまし

た。

ジョバンニは、（さうだ、ぼくたちはいま、いつしよにさそつて出掛けたのだ。）とおもひながら、

「どこかで待ってるやうか。」と云ひました。するとカムパネルラは

「ザネリはもう帰つたよ。お父さんが迎ひにきたんだ。」

カムパネルラは、なぜかさう云ひながら、少し顔いろが青ざめて、どこか苦しいといふふうでした。するとジョバンニも、なんだかどこかに、何か忘れたものがあるといふやうな、おかしな気持ちがあつてしまつてしまひました。

ところがカムパネルラは、窓から外をのぞきながら、もうすつ

かり元気が直って、勢よく云ひました。

「あゝしまった。ぼく、水筒を忘れてきた。スケッチ帳も忘れてきた。けれど構はない。もうぢき白鳥の停車場だから。ぼく、白鳥を見るなら、ほんたうにすぎだ。川の遠くを飛んでみたって、ぼくはきつと見える。」そして、カムパネルラは、円い板のやうになつた地図を、しきりにぐるぐるまはして見てゐました。まったくその中に、白くあらはされた天の川の左の岸に沿って一条の鉄道線路が、南へ南へとたどって行くのでした。そしてその地図の立派なことは、夜のやうにまつ黒な盤の上に、一一の停車場や三角標、泉水や森が、青や橙や緑や、うつくしい光でちりばめられてありました。ジヨバンニはなんだかその地図をどこかで見た

やうにおもひました。

「この地図はどこで買ったの。黒曜石でできてるねえ。」

ジョバンニが云ひました。

「銀河ステーションで、もらったんだ。君もらはなかったの。」

「あゝ、ぼく銀河ステーションを通ったらうか。いまぼくたちの居るところ、ここだらう。」

ジョバンニは、白鳥と書いてある停車場のしるしの、すぐ北を指しました。

「さうだ。おや、あの河原は月夜だらうか。」そつちを見ますと、青白く光る銀河の岸に、銀いろの空のすゝきが、もうまるでいちめん、風にさらさらさらさら、ゆられてうごいて、波を立ててゐ

るのでした。

「月夜でないよ。銀河だから光るんだよ。」ジヨバンニは云ひながら、まるでね上りたいくらゐ愉快になつて、足をこつこつ鳴らし、窓から顔を出して、高く高く星めぐりの口笛を吹きながら一生けん命延びあがつて、その天の川の水を、見きはめやうとしました。はじめはどうしてもそれが、はつきりしませんでした。けれどもだんだん気をつけて見ると、そのきれいな水は、ガラスよりも水素よりもすきとほつて、ときどき眼の加減か、ちらちら紫いろのこまかな波をたてたり、虹のやうにぎらつと光つたりしながら、声もなくどンドン流れて行き、野原にはあつちにもこつちにも、燐光の三角標が、うつくしく立ってゐたのです。遠いも

のは小さく、近いものは大きく、遠いものは橙や黄いろではつきりし、近いものは青白く少しかすんで、或ひは三角形、或ひは四辺形、あるひは電や鎖の形、さまざまにならんで、野原いっぱい光つてゐるのです。ジョバンニは、まるでどきどきして、頭をやけに振りましました。するとほんたうに、そのきれいな野原中の青や橙や、いろいろかゞやく三角標も、てんでに息をつくやうに、ちらちらゆれたり顫へたりしました。

「ぼくはもう、すっかり天の野原に來た。」ジョバンニは云ひました。「それに」この汽車石炭をたいてゐないねえ。「ジョバンニが左手をつき出して窓から前の方を見ながら云ひました。

「アルコールか電気だらう。」カムパネルラが云ひました。□

「ごとごとごとごと、その小さなきれいな汽車は、そらのすゝきの風にひるがへる中を、天の川の水や、三角点の青じろい微光の中を、どこまでもどこまでもと、走って行くのでした。」

「あゝ、りんどうの花が咲いてゐる。もうすっかり秋だねえ。」
カムパネルラが、窓の外を指さして云ひました。

線路のへりになったみぢかい芝草の中に、月長石でも刻まれたやうな、すばらしい紫のりんどうの花が咲いてゐました。

「ぼく、飛び下りて、あいつをとって、また飛び乗ってみせやうか。」ジヨバンニは胸を躍らせて云ひました。

「もうだめだ。あんなにうしろへ行つてしまつたから。」
カムパネルラが、さう云つてしまふかしまはないうち、次のり

んだうの花が、いっぱい光って過ぎて行きました。

と思つたら、もう次から次から、たくさんいきいろな底をもつたりんだうの花のコップが、湧くやうに、雨のやうに、眼の前を通り、三角標の列は、けむるやうに燃えるやうに、いよいよ光って立つたのです。

〔七、〕 北十字きたじふじとプリオシン海岸

「おつかさんは、ぼくをゆるして下さるだらうか。」

いきなり、カムパネルラが、思ひ切ったといふやうに、少しどもりながら、急きこんで云ひました。

ジヨバンニは、

（あゝ、さうだ、ぼくのおつかさんは、あの遠い一つのちりのやうに見える橙いろの三角標のあたりにゐらっしゃって、いまぼくのことを考へてゐるんだつた。）と思ひながら、ぼんやりしてだまつてゐました。

「ぼくはおつかさんが、ほんたうに幸になるなら、どんなことでもする。けれども、いったいどんなことが、おつかさんのいちばんの幸なんだらう。」カムパネルラは、なんだか、泣きだしたいのを、一生けん命こらえてゐるやうでした。

「きみのおつかさんは、なんにもひどいことないぢやないの。」
ジヨバンニはびっくりして叫びました。

「ぼくわからない。けれども、誰だつて、ほんたうにいいことをしたら、いちばん幸なんだねえ。だから、おつかさんは、ぼくをゆるして下さると思ふ。」カムパネルラは、なにかほんたうに決心してゐるやうに見えました。

俄かに、車のなかで、ぱつと白く明るくなりました。見ると、もうじつに、金剛石や草の露やあらゆる立派さをあつめたやうな、きらびやかな銀河の河床の上を水は声もなくかたちもなく流れ、その流れのまん中に、ぼうつと青白く後光の射した一つの島が見えるのでした。その島の平らないただきに、立派な眼もさめるやうな、白い十字架がたつて、それはもう凍つた北極の雲で鑄たといつたらいゝか、すきつとした金いろの円光をいただいて、しづ

かに永久に立ってゐるのでした。

「ハルレヤ、ハルレヤ。」前からもうしろからも声がありました。ふりかへって見ると、車室の中の旅人たちは、みなまつすぐにきもののひだを垂れ、黒いバイブルを胸にあてたり、水晶の珠数をかけたり、どの人もつつましく指を組み合せて、そちに祈つてゐるのでした。思はず二人もまつすぐに立ちあがりました。カムパネルラの頬は、まるで熟した苹果のあかしのやうにうつくしくかゞやいて見えました。

そして島と十字架とは、だんだんうしろの方へうつって行きました。

向ふ岸も、青じろくぼうつと光ってけむり、時々、やっぱりす

すきが風にひるがへるらしく、さつとその銀いろがけむつて、息でもかけたやうに見え、また、たくさんのりんどうの花が、草をかくれたり出たりするのは、やさしい狐火のやうに思はれました。

それもほんのちよつとの間、川と汽車との間は、すすきの列でさへぎられ、白鳥の島は、二度ばかり、うしろの方に見えました。が、ぢきもうずうつと遠く小さく、絵のやうになつてしまひ、またすゝきがざわざわ鳴つて、たうたうすつかり見えなくなつてしまひました。ジョバンニのうしろには、いつから乗つてゐたのか、せいの高い、黒いかつぎをしたカトリック風の尼さんが、まん円な緑の瞳を、じつとまつすぐに落して、まだ何かことばか声かが、そつちから伝はつて来るのを、度んで聞いてゐるといふやうに見

えました。旅人たちはしづかに席に戻り、二人も胸いっぱいのかなしみに似た新らしい気持ちをも、何気なくちがった語で、そつと話し合つたのです。

「もうぢき白鳥の停車場だねえ。」

「あゝ、十一時かつきりには着くんだよ。」

早くも、シグナルの緑の燈と、ぼんやり白い柱とが、ちらつと窓のそとを過ぎ、それから硫黄のほのほのやうなくらいぼんやりした転てつ機の前のあかりが窓の下を通り、汽車はだんだんゆるやかになつて、間もなくプラットホームの一系列の電燈が、うつくしく規則正しくあらはれ、それがだんだん大きくなってひろがつて、二人は丁度白鳥停車場の、大きな時計の前に来てとまりまし

た。

さわやかな秋の時計の盤面には、青く灼かれたはがねの二本の針が、くつきり十一時を指しました。みんなは、一ぺんに下りて、車室の中はがらんとなくなってしまひました。

〔二十分停車〕と時計の下に書いてありました。

「ぼくたちも降りて見やうか。」ジョバンニが云ひました。

「降りやう。」二人は一度にはねあがつてドアを飛び出して改札口へかけて行きました。ところが改札口には、明るい紫がかつた電燈が、一つ点いてゐるばかり、誰も居ませんでした。そこら中を見ても、駅長や赤帽らしい人の、影もなかつたのです。

二人は、停車場の前の、水晶細工のやうに見える銀杏の木に囲

まれた、小さな広場に出ました。そこから幅の広いみちが、まっすぐに銀河の青光の中へ通つてゐました。

さきに降りた人たちは、もうどこへ行つたか一人も見えませんでした。二人がその白い道を、肩をならべて行きますと、二人の影は、ちやうど四方に窓のある室の中の、二本の柱の影のやうに、また二つの車輪の輻のやうに幾本も幾本も四方へ出るのです。そして間もなく、あの汽車から見えたきれいな河原に來ました。

カムパネルラは、そのきれいな砂を一「つ」まみ、掌にひろげ、指できしきしさせながら、夢のやうに云つてゐるのです。

「この砂はみんな水晶だ。中で小さな火が燃えてゐる。」

「さうだ。」どこでぼくは、そんなこと習つたらうと思ひながら、

ジヨバンニもぼんやり答へてみました。

河原の礫は、みんなすきとほつて、たしかに水晶や黄玉や、またくしやくしやの皺曲をあらはしたのや、また稜から霧のやうな青白い光を出す鋼玉やらでした。ジヨバンニは、走つてその渚に行つて、水に手をひたしました。けれどもあやしいその銀河の水は、水素よりもつとすきとほつてゐたのです。それでもたしかに流れてゐたことは、二人の手首の、水にひたつたところが、少し水銀いろに浮いたやうに見え、その手首にぶつつかつてできた波は、うつくしい燐光をあげて、ちらちらと燃えるやうに見えたのでもわかりました。

川上の方を見ると、すすきのいっばいに生えてゐる崖の下に、

白い岩が、まるで運動場のやうに平らに川に沿って出てゐるのでした。そこに小さな五六人の人かげが、何か掘り出すか埋めるかしてゐるらしく、立ったり屈んだり、時々なにかの道具が、ピカツと光ったりしました。

「行つてみやう。」二人は、まるで一度に叫んで、そつちの方へ走りました。その白い岩になつた処の入口に、「プリオシン海岸」といふ、瀬戸物のつるつるした標札が立つて、向ふの渚には、ところどころ、細い鉄の欄干も植えられ、木製のきれいなベンチも置いてありました。

「おや、変なものがあるよ。」カムパネルラが、不思議さうに立ちどまって、岩から黒い細長いさきの尖つたくるみの実のやうな

ものをひろひました。

「くるみの実だよ。そら、沢山ある。流れて来たんぢやない。岩の中に入ってるんだ。」

「大きいね、このくるみ、倍あるね。こいつはすこしもいたんでない。」

「早くあすこへ行つて見やう。きっと何か堀つてるから。」

二人は、ぎざぎざの黒いくるみの実を持ちながら、またさつきの方へ近よつて行きました。左手の渚には、波がやさしい稲妻のやうに燃えて寄せ、右手の崖には、いちめん銀や貝殻でこさえたやうなすすきの穂がゆれたのです。

だんだん近付いて見ると、一人のせいの高い、ひどい近眼鏡を

かけ、長靴をはいた学者らしい人が、手帳に何かせわしさうに書きつけながら、鶴つるはし嘴をふりあげたり、スコープをつかったりしてゐる、三人の助手らしい人たちに夢中でいろいろ指図をしてゐました。

「そのその突起を壊さないやうに。スコープを使ひたまへ、スコープを。おっと、もう少し遠くから掘つて。いけない、いけない。なぜそんな乱暴をするんだ。」

見ると、その白い柔らかかな岩の中から、大きな大きな青じろい獣の骨が、横に倒れて潰れたといふ風になつて、半分以上掘り出されてゐました。そして気をつけて見ると、そこらには、蹄の二つある足跡のついた岩が、四角に十ばかり、きれいに切り取られ

て番号がつけられてありました。

「君たちは参観かね。」その大学士らしい人が、眼鏡をきらつとさせて、こつちを見て話しかけました。「くるみが沢山あつたらう。それはまあ、ざつと百二十万年ぐらゐ前のくるみだよ。ごく新らしい方さ。ここは百二十万年前、第三紀のあこのころは海岸でね、この下からは貝がらも出る。いま川の流れてあるとこに、そつくり塩水が寄せたり引いたりもしてゐたのだ。このけものかね、これはボスといつてね、おいおい、そこつるはしはよしたまへ。ていねいに鑿でやってくれたまへ。ボス「と」いつてね、いまの牛の先祖で、昔はたくさん居たさ。」

「標本にするんですか。」

「いや、証明するに要るんだ。ぼくらからみると、ここは厚い立派な地層で、百二十万年ぐらゐる前にできたといふ証拠もいろいろあがるけれども、ぼくらとちがったやつからみてもやつぱりこんな地層に見えるかどうか、あるひは風か水やがらんとした空かに見えやしないかといふことなのだ。わかつたかい。けれども、おいおい。それもスコープではいけない。そのすぐ下に肋骨が埋もれてる筈ぢやないか。」大学士はあはてゝ走つて行きました。

「もう時間だよ。行かう。」カムパネルラが地図と腕時計とをくらべながら云ひました。

「ああ、ではわたくしどもは失礼いたします。」ジョバンニは、ていねいに大学士におちぎしました。

「さうですか。いや、さよなら。」大学士は、また忙がしきうに、あちこち歩きまはつて監督をはじめました。

二人は、その白い岩の上を、一生けん命汽車におくれないやうに走りました。そしてほんたうに、風のやうに走れたのです。息も切れず膝もあつくありませんでした。

こんなにしてかけるなら、もう世界中だつてかけれると、ジョバンニは思ひました。

そして二人は、前のあの河原を通り、改札口の電燈がだんだん大きくなつて、間もなく二人は、もとの車室の席に座つて、いま行つて来た方を、窓から見てゐました。

〔八、〕 鳥を捕る人

「ここへかけてもようございますか。」

がさがさした、けれども親切さうな、大人の声が、二人のうしろで聞えました。

それは、茶いろの少しぼろぼろの外套を着て、白い巾でつつんだ荷物を、二つに分けて肩に掛けた、赤髯のせなかのかがんだ人でした。

「えゝ、いゝんです。」ジヨバンニは、少し肩をすぼめて挨拶しました。その人は、ひげの中でかすかに微笑ひながら、荷物をゆつくり網棚にのせました。ジヨバンニは、なにか大へんさびしい

やうなかなしいやうな気がして、だまって正面の時計を見てゐましたら、ずうつと前の方で、硝子の笛のやうなものが鳴りました。汽車はもう、しづかにうごいてゐたのです。カムパネルラは、車室の天井を、あちこち見てゐました。その一つのあかりに黒い甲虫がとまってその影が大きく天井にうつつてゐたのです。赤ひげの人は、なにかなつかしきさうにわらひながら、ジョバンニやカムパネルラのやうすを見てゐました。汽車はもうだんだん早くなつて、すすきと川と、かはるがはる窓の外から光りました。

赤ひげの人が、少しおづおづしながら、二人に訊きました。

「あなた方は、どちらへ入らっしゃるんですか。」

「どこまでも行くんです。」ジョバンニは、少しきまり悪さうに

答へました。

「それはいいね。この汽車は、じつさい、どこまででも行きますぜ。」

「あなたはどこへ行くんです。」カムパネルラが、いきなり、喧嘩のやうにたづねましたので、ジョバンニは、思はずわらひました。すると、向ふの席に居た、尖った帽子をかぶり、大きな鍵を腰に下げた人も、ちらつとこつちを見てわらひましたので、カムパネルラも、つい顔を赤くして笑ひだしてしまひました。ところがその人は別に怒つたでもなく、頬をびくびくしながら返事しました。

「わっしはすぐそこで降ります。わっしは、鳥をつかまへる商売

でね。」

「何鳥ですか。」

「鶴や雁です。さぎも白鳥もです。」

「鶴はたくさんゐますか。」

「居ますとも、さつきから鳴いてまさあ。聞かなかつたのですか。」

「いゝえ。」

「いまでも聞えるぢやありませんか。そら、耳をすまして聴いてごらんなさい。」

二人は眼を挙げ、耳をすましました。ごとごと鳴る汽車のひびきと、すすきの風との間から、ころんころんと水の湧くやうな

音が聞えて来るのでした。

「鶴、どうしてとるんですか。」

「鶴ですか、それとも鷺ですか。」

「鷺です。」 ジョバンニは、どっちでもいいと思ひながら答へました。

「そいつはな、雑作ない。さぎといふものは、みんな天の川の砂が凝つて、ぼおつとできるもんですからね、そして始終川へ帰りますからね、川原で待つてゐて、鷺がみんな、脚をかういふ風にして下りてくるところを、そいつが地べたへつくかつかないうちに、ぴたつと押へちまふんです。するともう鷺は、かたまつて安心して死んぢまひます。あとはもう、わかり切つてまさあ。押し葉に

するだけです。」

「鷺を押し葉にするんですか。標本ですか。」

「標本ぢやありません。みんなたべるぢやありませんか。」

「おかしいねえ。」カムパネルラが首をかしげました。

「おかしいも不審もありますんや。そら。」その男は立って、網棚から包みをおろして、手ばやくくるくると解きました。「さあ、ごらんなさい。いまとって来たばかりです。」

「ほんたうに鷺だねえ。」二人は思はず叫びました。まっ白な、あのさつきの北の十字架のやうに光る鷺のからだだが、十ばかり、少しひらべつたくなつて、黒い脚をちぢめて、浮彫のやうにならんでゐたのです。

「眼をつぶってるね。」カムパネルラは、指でそつと、鷺の三日月がたの白い瞑った眼にさわりました。頭の上の槍のやうな白い毛もちやんとついてゐました。

「ね、さうでせう。」鳥捕りは風呂敷を重ねて、またくるくると包んで紐でくくりました。誰がいったいここで鷺なんぞ喰べるだらうとジョバンニは思ひながら訊きました。

「鷺はおいしいんですか。」

「えゝ、毎日注文があります。しかし雁の方が、もつと売れます。雁の方がずつと柄がいいし、第一手数がありませんからな。それ。」「鳥捕りは、また別の方の包みを解きました。すると黄と青じろとまだらになって、なにかのあかりのやうにひかる雁が、ちや

うどさっきの鷺のやうに、くちばしを揃へて、少し扁べったくなつて、ならんでゐました。

「こつちはすぐ喰べられます。どうです、少しおあがりなさい。」
鳥捕りは、黄いろな雁の足を、軽くひっぱりました。するとそれは、チョコレートでもできてゐるやうに、すつときれいにはなれました。

「どうです。すこしたべてごらんなさい。」「」鳥捕りは、それを二つにちぎつてわたしました。ジョバンニは、ちよつと喰べてみて、（なんだ、やっぱりこいつはお菓子だ。」「チョコレートよりも、もつとおいしいけれども、こんな雁が飛んでゐるもんか。この男は、どこかそこらの野原の菓子屋だ。けれどもぼくは、こ

のひとをばかにしながら、この人のお菓子をたべてゐるのは、大へん気の毒だ。」とおもひながら、やっぱりぽくぽくそれをたべてゐました。

「もしおあがりなさい。」鳥捕りがまた包みを出しました。ジヨバンニは、もつとたべたかったですけれども、

「えゝ、ありがたう。」と云つて遠慮しましたら、鳥捕りは、ここでは向ふの席の、鍵をもつた人に出しました。

「いや、商売ものを貰つちやすみませんな。」その人は、帽子をとりました。

「いゝえ、どういたしまして。どうです、今年の渡り鳥の景気は」

「いや、すてきなもんですよ。一昨日の第二限ころなんか、なぜ燈台の灯を、規則以外に間「一字分空白」させるかって、あつちからもこつちからも、電話で故障が来ましたが、なあに、こつちがやるんぢやなくて、渡り鳥どもが、まつ黒にかたまつて、あかしの前を通るのですから仕方ありませんや。わたしあ、べらぼうめ、そんな苦情は、おれのところへ持つて来たつて仕方がねえや、ばさばさのマントを着て脚と口との途方もなく細い大将へやれつて、斯う云つてやりましたがね、はっは。」

すすきがなくなつたために、向ふの野原から、ぱつとあかりが射して来ました。

「鷺の方はなぜ手数なんですか。」カムパネルラは、さつきから、

訊かうと思つてゐたのです。

「それはね、鷺を喰べるには、」鳥捕りは、こつちに向き直りました。「天の川の水あかりに、十日もつるして置くかね、さうでなけあ、砂に三四日うづめなけあいけないんだ。さうすると、水銀がみんな蒸発して、喰べられるやうになるよ。」

「こいつは鳥ぢやない。たゞのお菓子でせう。」やっぱりおなじことを考へてゐたとみえて、カムパネルラが、思ひ切つたといふやうに、尋ねました、鳥捕りは、何か大へんあわてた風で、

「さうさう、ここで降りなけあ。」と云ひながら、立つて荷物をとつたと思ふと、もう見えなくなつてゐました。

「どこへ行つたんだらう。」二人は顔を見合せましたら、燈台守

は、にやにや笑つて、少し伸びあがるやうにしながら、二人の横の窓の外をのぞきました。二人もそつちを見ましたら、たつたいまの鳥捕りが、黄いろと青じろの、うつくしい燐光を出す、いちめんのかはらははこぐさの上に立つて、まじめな顔をして両手をひろげて、じつとそらを見てゐたのです。

「あすこへ行つてる。ずるぶん奇体だねえ。きつとまた鳥をつかまへるとこだねえ。汽車が走つて行かないうちに、早く鳥がおりるといゝな。」と云つた途端、がらんとした桔梗いろの空から、さつき見たやうな鷺が、まるで雪の降るやうに、ぎやあぎやあ叫びながら、いっぱいに舞ひおりて来ました。するとあの鳥捕りは、すつかり注文通りだといふやうにほくほくして、両足をかつきり

六十度に開いて立って、鷺のちぢめて降りて来る黒い脚を両手で片っ端から押へて、布の袋の中に入れるのでした。すると鷺は、螢のやうに、袋の中でしばらく、青くペカペカ光ったり消えたりしてゐましたが、おしまひたうたう、みんなぼんやり白くなつて、眼をつぶるのでした。ところが、つかまへられる鳥よりは、つかまへられないで無事に天の川の砂の上に降りるものの方が多かつたのです。それは見てゐると、足が砂へつくや否や、まるで雪の融けるやうに、縮まって扁べつたくなつて、間もなく熔鉞炉から出た銅の汁のやうに、砂や砂利の上にひろがり、しばらくは鳥の形が、砂についてゐるのでしたが、それも二三度明るくなつたり暗くなつたりしてゐるうちに、もうすっかりまはりと同じいろに

なつてしまふのでした。

鳥捕りは二十疋ばかり、袋に入れてしまふと、急に両手をあげて、兵隊が鉄砲弾にあたつて、死ぬときのやうな形をしました。と思つたら、もうそこに鳥捕りの形はなくなつて、却つて、

「あゝせいせいした。どうもからだに恰度合ふほど稼いでゐるくらゐ、いゝことはありませんな。」といふききおぼえのある声が、ジヨバンニの隣りにしました。見ると鳥捕りは、もうそこでとつて来た鷺を、きちんとそろへて、一つづつ重ね直してゐるのでした。

「どうしてあすこから、いつぺんにこゝへ来たんですか。」ジヨバンニが、なんだかあたりまへのやうな、あたりまへでないやう

な、おかしな気がして問ひました。

「どうしてつて、来やうとしたから来たんです。ぜんたいあなた方は、どちらからおいでですか。」

ジョバンニは、すぐ返事しやうと思ひましたけれども、さあ、ぜんたいどこから来たのか、もうどうしても考へつきませんでした。カムパネルラも、頬をまつ赤にして何か思ひ出さうとしてゐるのでした。

「あゝ、遠くからですね。」鳥捕りは、わかつたといふやうに雑作なくうなづきました。

〔九、〕 ジョバンニの切符

「もうこゝらは白鳥区のおしまひです。ごらんなさい。あれが名高いアルビレオの観測所です。」

窓の外の、まるで花火でいっぱいのやうな、あまの川のまん中に、黒い大きな建物が四棟ばかり立って、その一つの平屋根の上に、眼もさめるやうな、青宝玉と黄玉の大きな二つのすきとほつた球が、輪になってしづかにくるくるとまはってゐました。黄いろのがだんだん向ふへまはって行って、青い小さいのがこつちへ進んで来、間もなく二つのはじは、重なり合つて、きれいな緑いろの両面凸レンズのかたちをつくり、それもだんだん、まん中がふくらみ出して、たうたう青いのは、すっかりトパースの正面に

来ましたので、緑の中心と黄いろな明るい環とができました。それがまただんだん横へ外れて、前のレンズの形を逆に〔繰〕り返し、たうたうすつとはなれて、サファイアは向ふへめぐり、黄いろのはこつちへ進み、また丁度さっきのやうな風になりました。銀河の、かたちもなく音もない水にかこまれて、ほんたうにその黒い測候所が、睡つてゐるやうに、しづかによこたはつたのです。「あれは、水の速さをはかる器械です。水も……。」鳥捕りが云ひかけたとき、

「切符を拝見いたします。」三人の席の横に、赤い帽子をかぶつたせいの高い車掌が、いつかまっすぐに立つてゐて云ひました。鳥捕りは、だまつてかくしから、小さな紙きれを出しました。車

掌はちよつと見て、すぐ眼をそらして、（あなた方のは？）といふやうに、指をうごかしながら、手をジョバンニたちの方へ出しました。

「さあ、」ジョバンニは困つて、もぢもぢしてゐましたら、カムパネルラは、わけもないといふ風で、小さな鼠いろの切符を出しました。ジョバンニは、すっかりあはててしまつて、もしか上着のポケットにでも、入つてゐたかとおもひながら、手を入れて見ましたら、何か大きな畳んだ紙きれにあたりました。こんなもの入つてゐたらうかと思つて、急いで出してみましたら、「」それは四つに折つたはがきぐらゐの大きな緑いろの紙でした。車掌が手を出してゐるもんですから何でも構はない、やっちまへと思つ

て渡しましたら、車掌はまっすぐに立ち直つて丁寧にそれを開いて見てゐました。そして読みながら上着のぼたんやなんかしきりに直したりしてゐましたし燈台看守も下からそれを熱心にのぞいてゐましたから、ジョバンニはたしかにあれは証明書か何かだつたと考へて少し胸が熱くなるやうな気がしました。

「これは三次空間の方からお持ちになつたのですか。」車掌がたづねました。

「何だかわかりません。」もう大丈夫だと安心しながらジョバンニはそつちを見あげてくつくつ笑ひました。

「よろしうございます。南十字サウザンクロスへ着きますのは、次の第三時

ころになります。」車掌は紙をジョバンニに渡して向ふへ行きま

した。

カムパネルラは、その紙切れが何だったか待ち兼ねたといふやうに急いでのできこみました。ジョバンニも全く早く見たかったです。ところがそれはいちめん黒い唐草のやうな模様の中に、おかしな十ばかりの字を印刷したものでだまって見てみると何だかその中へ吸ひ込まれてしまふやうな気がするのです。すると鳥捕りが横からちらつとそれを見てあはてたやうに云ひました。

「おや、こいつは大したもんですぜ。こいつはもう、ほんたうの天上へさへ行ける切符だ。天上どこぢやない、どこでも勝手にあけるける通行券です。こいつをお持ちになれあ、なるほど、こんな不完全な幻想第四次の銀河鉄道なんか、どこまででも行ける筈で

さあ、あなた方大したもんですね。」

「何だかわかりません。」ジョバンニが赤くなつて答へながらそれを又畳んでかくしに入れました。そしてきまりが悪いのでカムパネルラと二人、また窓の外をながめてゐましたが、その鳥捕りの時々大したもんだといふやうにちらちらこつちを見てゐるのがぼんやりわかりました。

「もうぢき鷺の停車場だよ。」カムパネルラが向ふ岸の、三つならんだ小さな青じろい三角標と地図とを見較べて云ひました。

ジョバンニはなんだかわけもわからずにはかにとりの鳥捕りが気の毒でたまらなくなりました。鷺をつかまへてせいせいたとよろこんだり、白いきれでそれをくるくる包んだり、ひとの

切符をびつくりしたやうに横目で見てあはてゝほめだしたり、そんなことを一一考へてみると、もうその見ず知らずの鳥捕りのために、ジョバンニの持つてゐるものでも食べるものでもなんでもやってしまひたい、もうこの人のほんたうの幸になるなら自分があの光る天の川の河原に立つて百年つゞけて立つて鳥をとつてやつてもいゝといふやうな気がして、どうしてももう黙つてゐられなくなりました。ほんたうにあなたのほしいものは一体何ですか、と訊かうとして、それではあんまり出し抜けだから、どうせうかと考へて振り返つて見ましたら、そこにはもうあの鳥捕りが居ませんでした。網棚の上には白い荷物も見えなかつたのです。また窓の外で足をふんばつてそらを見上げて鷺を捕る支度をしてゐる

のかと思つて、急いでそつちを見ましたが、外はいちめんのうつくしい砂子と白いすゝきの波ばかり、あの鳥捕りの広いせなかも尖つた帽子も見えませんでした。

「あの人どこへ行つたらう。」カムパネルラもぼんやりさう云つてみました。

「どこへ行つたらう。一体どこでまたあふのだらう。僕はどうしても少しあの人に物を言はなかつたらう。」

「あゝ、僕もさう思つてゐるよ。」

「僕はある人が邪魔なやうな気がしたんだ。だから僕は大へんつらい。」ジヨバンニはこんな変てこな気もちは、ほんたうにはじめてだし、こんなこと今まで云つたこともないと思ひました。

「何だか苹果の匂がする。僕いま苹果のこと考へたためだらうか。
」カンパネルラが不思議さうにあたりを見まはしました。

「ほんたうに苹果の匂だよ。それから野茨の匂もする。」ジョバンニもそこらを見ましたがやっぱりそれは窓からでも入って来るらしいのでした。いま秋だから野茨の花の匂のする筈はないとジョバンニは思ひました。

そしたら俄かにそこに、つやつやした黒い髪の六つばかりの男の子が赤いジャケツのぼたんもかけずひどくびっくりしたやうな顔をしてがたがたふるえてはだしで立ってゐました。隣りには黒い洋服をきちんと着たせいの高い青年が一ぱいに風に吹かれてゐるけやきの木のやうな姿勢で、男の子の手をしっかりとひいて立つ

てみました。

「あら、こゝどこでせう。まあ、きれいだわ。」青年のうしろにもひとり十二ばかりの眼の茶いろな可愛らしい女の子が黒い外套を着て青年の腕にすがって不思議さうに窓の外を見てゐるのでした。

「ああ、こゝはランカシャイヤだ。いや、コンネクテカツト州だ。いや、ああ、ぼくたちはそらへ来たのだ。わたしたちは天へ行くのです。ごらんなさい。あのしるしは天上のしるしです。もうなんにも□こわいことありません。わたくしたちは神さまに召されてゐるのです。□」黒服の青年はよろこびにかゝやいてその女の子に云ひました。けれどもなぜかまた額に深く皺を刻んで、

それに大へんつかれてゐるらしく、無理に笑ひながら男の子をジヨバン二のとなり座に座せました。

それから女の子にやさしくカムパネルラのとなりの席を指さしました。女の子はすなほにそこへ座つて、きちんと両手を組み合せました。

「ぼくおほねえさんのとこへ行くんだよう。」腰掛けたばかりの男の子は顔を変にして燈台看守の向ふの席に座つたばかりの青年に云ひました。青年は何とも云へず悲しさうな顔をして、ちつとその子の、ちぢれてぬれた頭を見ました。女の子は、いきなり両手を顔にあて、しくしく泣いてしまひました。

「お父さんやきくよねえさんはまだいろいろお仕事があるのです。

けれどももうすぐあとからいらっしやいます。それよりも、おつかさんはどんなに永く待つてゐらっしやつたでせう。わたしの大事なタダシはいまどんな歌をうたつてゐるだらう、雪の降る朝にみんなと手をつないでぐるぐるにはとこのやぶをまはつてあそんでゐるだらうかと考へたりほんたうに待つて心配してゐらっしやるんですから、早く行つておつかさんにお目にかゝりませうね。」

「うん、だけど僕、船に乗らなけあよかつたなあ。」

「えゝ、けれど、ごらんなさい、そら、どうです、あの立派な川ね、あすこはあの夏中、ツヰンクル、ツヰンクル、リトル、スタ―をうたつてやすむとき、いつも窓からぼんやり白く見えてゐたでせう。あすこですよ。ね、きれいでせう、あんなに光つてゐ

ます。」

泣いてゐた姉もハンケチで眼をふいて外を見ました。青年は教へるやうにそつと姉弟にまた云ひました。

「わたし「た」ちはもうなんにもかないことないのです。わたしたちはこんないゝところを旅して、ぢき神さまのところへ行きます。そこならもうほんたうに明るくて匂がよくて立派な人たちでいっぱいです。そしてわたしたちの代りにボートへ乗れた人たちは、きつとみんな助けられて、心配して待つてゐるめいめいのお父さんやお母さんや自分のお家へやら行くのです。さあ、もうぢきですから元気を出しておもしろくうたつて行きませう。」青年は男の子のぬれたやうな黒い髪をなで、みんなを慰めながら、自分も

だんだん顔いろがかゞやいて来ました。

「あなた方はどちらからいらつしやつたのですか。どうなすつたのですか。」さっきの燈台看守が「」やつと少しわかつたやうに青年にたづねました。青年はかすかにわらひました。

「いえ、氷山にぶつつかつて船が沈みましてね、わたしたちはこちらのお父さんが急な用で二ヶ月前一足さきに本国へお帰りになつたのであとから発つたのです。私は大学へはいつてゐて、家庭教師にやとはれてゐたのです。ところがちやうど十二日目、今日か昨日のあたりです、船が氷山にぶつつかつて一ぺんに傾きもう沈みかけました。月のあかりはどこかぼんやりありましたが、霧が非常に深かつたのです。ところがボートは左舷の方半分はもう

だめになつてゐましたから、とてもみんなは乗り切らないのです。もうそのうちにも船は沈みますし、私は必死となつて、どうか小さな人たちを乗せて下さいと叫びました。近くの人たちはすぐみちを開いてそして子供たちのために祈つて呉れました。けれどもそこからボートまでのところにはまだまだ小さな子どもたちや親たちやなんか居て、とても押しつける勇氣がなかつたのです。それでもわたくしはどうしてもこの方たちをお助けするのが私の義務だと思ひましたから前にゐる子供らを押しのけやうとしました。けれどもまたそんなにして助けてあげるよりはこゝの「まゝ神のお前にみんなで行く方がほんたうにこの方たちの幸福だとも思ひました。それからまたその神にそむく罪はわたくしひとり

しよつてぜひとも助けてあげやうと思ひました。けれどもどうして見てみるとそれができないのでした。子どもらばかりボートの中へはなしてやつてお母さんが狂気のやうにキスを送りお父さんがかなしいのをじつとこらえてまつすぐに立つてゐるなどとももう腸もちぎれるやうでした。そのうち船はもうずんずん沈みますから、私はもうすつかり覚悟してこの人たち二人を抱いて、浮べるだけは浮ばうとかたまつて船の沈むのを待つてゐました。誰が投げたかライフヴイが一つ飛んで来ましたけれども滑つてずうつと向ふへ行つてしまひました。私は一生けん命で甲板の格子になつたとこをはなして、三人それにしつかりとりつきました。どこからともなく「約二字分空白」番の声があがりました。たちま

ちみんなはいろいろな国語で一ぺんにそれをうたひました。そのとき俄かに大きな音がして私たちは水に落ち「」ました。もう渦に入つたと思ひながらしつかりこの人たちをだいてそれからぼうつとしたと思つたらもうこゝへ来てゐたのです。この方たちのお母さんは一昨年没くなられました。えゝボートはきつと助かつたにちがひありません 何せよほど熟練な水夫たちが漕いですばやく船からはなれてゐましたから。」

そこから小さな「嘆息」やいのりの声が聞えジョバンニもカムパネルラもいままで忘れてゐたいろいろのことをぼんやり思ひ出して眼が熱くなりました。

（あゝ、その大きな海はパシフィックといふのではなかつたらう

か。その氷山の流れる北のはての海で、小さな船に乗って、風や凍りつく潮水や、烈しい寒さとたたかつて、たれかゞ一生けんめいはたらいてゐる。ぼくはそのひとにほんたうに気の毒でそしてすまないやうな気がする。ぼくはそのひとのさひはひのためにつたいどうしたらいいのだ〔ら〕う。〕ジヨバンニは首を垂れて、すつかりふさぎ込んでしまひました。

「〔〕なにがしあはせかわからないです。ほんたうにどんなつらいことでもそれがたゞしいみちを進む中でのできごとなら峠の上りも下りもみんなほんたうの幸福に近づく一あしづつですから。」
燈台守がなぐさめてゐました。

「あゝさうです。たゞいちばんのさいはひに至るためにいろいろ

のかなしみもみんなおぼしめしです。」青年が祈るやうにさう答へました。

そしてあの姉弟はもうつかれてめいめいぐったり席によりかかつて睡つてゐました。さっきのあのはだしだった足にはいつか白い柔らかな靴をはいてゐたのです。

ごとごとごとと汽車はきらびやかな燐光の川の岸を進みました。向ふの方の窓を見ると、野原はまるで幻燈のやうでした。百も千もの大小さまざまの三角標、その大きなものの上には赤い点をうつた測量旗も見え、野原のはてはそれらがいちめん、たくさんたくさん集つてぼおつと青白い霧のやう、そこからかまたはもつと向ふからかときどきさまざまの形のぼんやりした狼煙のや

うなものが、かはるがはるきれいな桔梗いろのそらにうちあげられるのでした。じつにそのすきとほった奇麗な風は、ぼらの匂でいっぱいでした。

「いかゞですか。かういふ苹果はおはじめてでせう。」向ふの席の燈台看守がいつか黄金と紅でうつくしくいろどられた大きな苹果を落さないやうに両手で膝の上にかゝえてみました。

「おや、どつから来たのですか。立派ですねえ。こゝらではこんな苹果ができるのですか。」青年はほんたうにびっくりしたらしく燈台看守の両手にかゝへられた一もりの苹果を眼を細くしたり首をまげたりしながらわれを忘れてながめてみました。

「いや、まあおとり下さい。どうか、まあおとり下さい。」青年

は一つとつてジヨバンニたちの方をちよつと見ました。「さあ、向ふの坊ちゃんがた。いかゞですか。おとり下さい。」ジヨバンニは坊ちゃんといはれたのです。こししやくにさわつてだまつてゐましたがカムパネルラは「ありがたう、」と云ひました。すると青年は自分でとつて一つづつ二人に送つてよこしましたのでジヨバンニも立つてありがたうと云ひました。

燈台看守はやつと両腕があいたのでこんどは自分で一つづつ睡つてゐる姉弟の膝にそつと置きました。

「どうもありがたう。どこでできるのですか。こんな立派な苹果は。」

青年はつくづく見ながら云ひました。

「この辺ではもちろん農業はいたしますけれども大ていひとりにいゝものができやうな約束になつて居ります。農業だつてそんなに骨は折れはしません。たいてい自分の望む種子さへ播けばひとりでにどんどんできます。米だつてパシフキツク辺のやうに穀もないし十倍も大きくて匂もいゝのです。けれどもあなたがたのいらつしやる方なら農業はもうありません。苹果だつてお菓子」
「だつてかすが少しもありませんからみんなそのひとそのひとによつてちがつたわづかのいゝかほりになつて毛あなからちらけてしまふのです。」

にはかに男の子がぱつちり眼をあいて云ひました。「あゝぼくいまお母さんの夢をみてゐたよ。お母さんがね立派な戸棚や本の

あるとこに居てね、ぼくの方を見て手をだしてにこにこにこにこにわらったよ。ぼくおつかさん。りんごをひろつてきてあげませうか云ったら眼がさめちやった。あゝこゝさっきの汽車のなかだねえ。」

「その苹果がそこにあります。このおぢさんにいたゞいたのですよ。」青年が云ひました。「ありがたうおぢさん。おや、かほるねえさんまだねてるねえ、ぼくおこしてやらう。ねえさん。ごらん、りんごをもらったよ。おきてごらん。」姉はわらつて眼をさましまぶしさうに両手を眼にあてゝそれから苹果を見ました。男の子はまるでパイを喰べるやうにもうそれを喰べてゐました、また折角剥いたそのきれいな皮も、くるくるコルク抜きのような形

になつて床へ落ちるまでの間にはすうつと 灰いろに光つて蒸発してしまふのでした。

二人はりんごを大切にポケットにしまひました。

川下の向ふ岸に青く茂つた大きな林が見え、その枝には熟してまつ赤に光る円い実がいっぱい、その林のまん中に高い高い三角標が立つて、森の中からはオーケストラベルやジロフォンにまぢつて何とも云へずきれいな音いろが、とけるやうに浸みるやうに風につれて流れて来るのでした。

青年はぞくつとしてからだをふるふやうにしました。

だまつてその譜を聞いてみると、そこらにいちめん黄いろやうすい緑の明るい野原か敷物かゞひろがり、またまつ白な〔蠟〕の

やうな露が太陽の面を擦めて行くやうに思はれました。

「まあ、あの鳥。」カムパネルラのとりのかほると呼ばれた女の子が叫びました。

「からすでない。みんなかささぎだ。」カムパネルラがまた何気なく叱るやうに叫びましたので、ジョバンニはまた思はず笑ひ、女の子はきまり悪さうにしました。まったく河原の青じろいあかりの上に、黒い鳥がたくさんたくさんいっぱい列になつてまつてちつと川の微光を受けてゐるのでした。

「かささぎですねえ、頭のうしろのところに毛がぴんと延びてますから。」青年はとりなすやうに云ひました。

向ふの青い森の中の三角標はすっかり汽車の正面に来ました。

そのとき汽車のずうつとうしろの方からあの聞きなれた「約二字分空白」番の讚美歌のふしが聞えてきました。よほどの人数で合唱してゐるらしいのでした。青年はさつと顔いろが青ざめ、たつて一ぺんそつちへ行きさうにしましたが思ひかへしてまた座りました。かほる子はハンケチを顔にあててしまひました。ジヨバンニまで何だか鼻が変になりました。けれどもいつともなく誰ともなくその歌は歌ひ出されだんだんはつきり強くなりました。思はずジヨバンニもカムパネル「ラも一諸にうたひ出したのです。」そして青い楸※の森が見えない天の川の向ふにさめざめと光りながらだんだんうしろの方へ行つてしまひそこから流れて来るあやしい楽器の音ももう汽車のひゞきや風の音にすり耗らされて「

ずうつとかすかになりました。「あ孔雀が居るよ。」

「えゝたくさん居たわ。」女の子がこたえました。

ジョバンニはその小さく小さくなつていまはもう一つの緑いろの貝ぼたんのやうに見える森の上にさつさつと青じろく時々光つてその孔雀がはねをひろげたりとちたりする光の反射□□を見ました。

「さうだ、孔雀の声だつてさつき聞えた。」カムパネルラがかほる子に云ひました。

「えゝ、三十疋ぐらゐはたしかに居たわ。ハープのやうに聞えたのはみんな孔雀よ。」□□女の子が答へました。ジョバンニは俄かに何とも云へずかなしい気がして思はず「カムパネルラ、こゝ

からはねおりて遊んで行かうよ。」とこわい顔をして云はうとしたりたくらゐでした。

（カムパネルラ、僕もう行つちまふぞ。僕なんか鯨だつて見たことないや。）ジョバンニはまるでたまらないほどいらいらしながらそれでも堅く唇を噛んでこらえて窓の外を見てゐました。その窓の外には海豚のかたちももう見えなくなつて川は二つにわかれました。そのまつくらな島のまん中に高い高いやぐらが一つ組み立てその上に一人の寛い服を着て赤い帽子をかぶつた男が立つてゐました。そして両手に赤と青の旗をもつてそらを見上げて信号してゐるのでした。ジョバンニが見てゐる間その人はしきりに赤い旗をふつてゐましたが俄かに赤旗をおろしてうしろにかくすや

うにし青い旗を高く高くあげてまるでオーケストラの指揮者のやうに烈しく振りました。すると空中にざあつと雨のやうな音がして何かまつくらなものがいくかたまりもいくかたまりも鉄砲丸のやうに川の向ふの方へ飛んで行くのでした。ジヨバンニは思はず窓からからだを半分出してそつちを見あげました。美しい美しい桔梗いろのがらんとした空の下を実に何万といふ小さな鳥どもが幾組も幾組もめいめいせわしくせわしく鳴いて通つて行くのでした。「鳥が飛んで行くな。」ジヨバンニが窓の外で云ひました。「どら、」カムパネルラもそらを見ました。そのときあのやぐらの上のゆるい服の男は俄かに赤い旗をあげて狂気のやうにふりうごかしました。するとぴたつと鳥の群は通らなくなりそれと同時に

にびしやあんといふ潰れたやうな音が川下の方で起つてそれからしばらくしいんとしました。と思つたらあの赤帽の信号手がまた青い旗をふつて叫んでゐたのです。「いまこそわたれわたり鳥、いまこそわたれわたり鳥。」その声もはつきり聞えました。それといっしよにまた幾万といふ鳥の群がそらをまつすぐにかけたのです。二人の顔を出してゐるまん中の窓からあの女の子が顔を出して美しい頬をかゞやかせながらそらを仰ぎました。「まあ、この鳥、たくさんですわねえ、あらまあそらのきれいなこと。」女の子はジョバンニにはなしかけましたけれどもジョバンニは生意氣ないやだいと思ひながらだまつて口をむすんでそらを見あげてゐました。女の子は小さくほつと息をしてだまつて席へ戻りまし

た。カムパネルラが気の毒さうに窓から顔を引つ込めて地図を見てゐました。

「あの人鳥へ教へてるんでせうか。」女の子がそつとカムパネルラにたづねました。「わたり鳥へ信号してゐるんです。きつとどこからかのろしがあがるためでせう。」カムパネルラが少しおぼつかなさうに答へました。そして車の中はしいんとなりました。ジヨバンニはもう頭を引つ込めたかったのですけれども明るいところへ顔を出すのがつらかったのでだまつてこらえてそのまゝ立って口笛を吹いてゐました。

（どうして僕はこんなになさしいのだらう。僕はもつとこゝろもちをきれいに大きくもたなければいけない。あすこの岸のずうつ

と向ふにまるでけむりのやうな小さな青い火が見える。あれはほんたうにしづかでつめたい。僕はあれをよく見てこゝろもちをしづめるんだ。）ジョバンニは熱って痛いあたまを両手で押へるやうにしてそっちの方を見ました。（あゝほんたうにどこまでもどこまでも僕といっしょに行くひとはないだらうか。カンパネルラだつてあんな女の子とおもしろさうに談してゐるし僕はほんたうにつらいなあ。）ジョバンニの眼はまた泪でいっぱいになり天の川もまるで遠くへ行つたやうにぼんやり白く見えるだけでした。そのとき汽車はだんだん川からはなれて崖の上を通るやうになりました。向ふ岸もまた黒いいろの崖が川の岸を下流に下るにしたがつてだんだん高くなつて行くのでした。そしてちらつと大きな

たうもろこしの木を見ました。その葉はぐるぐるに縮れ葉の下にはもう美しい緑いろの大きな苞が赤い毛を吐いて真珠のやうな実もちらつと見えたのでした。それは「」だんだん数を増して来てもういまは列のやうに崖と線路との間にならび思はずジョバンニが窓から顔を引つ込めて向ふ側の窓を見ましたときは美しいそらの野原の地平線のはてまでその大きなたうもろこしの木がほとんどいちめん植えられてさやさや風にゆらぎその立派なちぎれた葉のさきからはまるでひるの間にいっぱい日光を吸った金剛石のやうに露がいっぱいについて赤や緑やきらきら燃えて光つてゐるのです。カムパネルラが「あれたうもろこしだねえ」とジョバンニに云ひましたけれどもジョバンニはどうしても気持がなほり

ませんでしたからたゞぶつきり棒に野原を見たまゝ、「さうだらう。」と答へました。そのとき汽車はだんだんしづかになっていくつかのシグナルとてんてつ器の灯を過ぎ小さな停車場にとまりました。

その正面の青じろい時計はかつきり第二時を示しその振子は風もなくなり汽車もうごかずしづかなしづかな野原のなかにカチツカチツと正しく時を刻んで行くのでした。

そしてそのころなら汽車は「新世界交響楽のやうに鳴りました。車の中ではあの黒服の丈高い青年もみんなやさしい夢を見てゐるのでした。（こんなしづかないゝとこで僕はどうしてもつと愉快になれないだらう。どうしてこんなにひとりさびしいのなら

う。けれどもカムパネルラなんかあんまりひどい、僕といっしょに汽車に乗ってゐながらまるであんな女の子とばかり談してゐるんだもの。僕はほんたうにつらい。」ジョバンニはまた両手で顔を半分かくすやうにして向ふの窓のそとを見つめてゐました。すきとほった硝子のやうな笛が鳴って汽車はしづかに動き出しカムパネルラもさびしさに星めぐりの口笛を吹きました。

「えゝ、えゝ、もうこの辺はひどい高原ですから。」うしろの方で誰かとしよりらしい人のいま眼がさめたといふ風ではきはき談してゐる声がありました。「たうもろこしだって棒で二尺も孔をあけておいてそこへ播かないと生えないんです。」

「さうですか。川まではよほどありませんかねえ、」 「えゝ、えゝ、

河までは二千尺から六千尺あります。もうまるでひどい峡谷になつてゐるんです。「さうさうこゝはコロラドの高原ぢやなかつたらうか、ジョバンニは思はずさう思ひました。向ふではあの一ばんの姉が小さな妹を自分の胸によりかゝらせて睡らせながら黒い瞳をうつとりと遠くへ投げて何を見るでもなしに考へ込んでゐるのでしたしカムパネルラはまださびしさうにひとり口笛を吹き二番目の女の子はまるで絹で包んだ苹果のやうな顔いろをしてジョバンニの見る方を見てゐるのでした。突然たうもろこしがなくなつて巨きな黒い野原がいつぱいにひらけました。新世界交響樂はいよいよはつきり地平線のはてから湧きそのまつ黒な野原のなかを一人のインデアンが白い鳥の羽根を頭につけたくさんの石を腕

と胸にかざり小さな弓に矢を番へて一目散に汽車を追って来るの
でした。「あら、インデアンですよ。インデアンですよ。おねえ
さまごらんなさい。」黒服の青年も眼をさましました。ジョバン
ニもカムパネルラも立ちあがりました。「走って来るわ、あら、
走って来るわ。追ひかけてゐるんでせう。」「いゝえ、汽車を追
つてるんじゃないんですよ。獵をするか踊るかしてるんですよ。」
青年はいまどこに居るか忘れたといふ風にポケットに手を入れて
立ちながら云ひました。

まったくインデアンは半分は踊つてゐるやうでした。第一かける
にしても足のふみやうがもつと経済もとれ本気にもなれさうでし
た。にはかにくつきり白いその羽根は前の方へ倒れるやうになり

インデアンはびたつと立ちどまってすばやく弓を空にひきました。そこから一羽の鶴がふらふらと落ちて来てまた走り出したインデアンの大きくひろげた両手に落ちこみました。インデアンはうれしさうに立ってわらひました。そしてその鶴をもつてこつちを見てゐる影ももうどんどん小さく遠くなり電しんばしらの碍子がきらつきらつと続いて二つばかり光つてまたたうもろこしの林になつてしまひました。こつち側の窓を見ますと汽車はほんたうに高い高い崖の上を走つてゐてその谷の底には川がやっぱり幅ひろく明るく流れてゐたのです。

「えゝ、もうこの辺から下りです。何せこんどは一ぺんにあの水面までおりて行くんですから容易ぢやありません。この傾斜があ

るもんですから汽車は決して向ふからこつちへは来な「い」んです。それもうだんだん早くなつたでせう。」さっきの老人らしい声が云ひました。

どんどんどん自動車は降りて行きました。崖のはじめに鉄道がかゝるときは川が明るく下にのぞけたのです。ジヨバンニはだんだんこゝろもちが明るくなつて来ました。汽車が小さな小屋の前を通つてその前にしよんぼりひとりの子供が立つてこつちを見てゐるときなどは思はずほうと叫びました。

どんどんどん自動車は走つて行きました。室中のひとたちは半分うしろの方へ倒れるやうになりながら腰掛にしつかりしがみついてゐました。ジヨバンニは思はずカムパネルラとわらひました。

もうそして天の川は汽車のすぐ横手をいままでよほど激しく流れて来たらしくときどきちら「ち」ら光つてながれてゐるのでした。うすあかい河原なでしこの花があちこち咲いてゐました。汽車はやうやく落ち着いたやうにゆつくりと走つてゐました。

向ふとこつちの岸に星のかたちとつるはしを書いた旛がたつてゐました。

「あれ何の旗だらうね。」ジョバンニがやつとものを云ひました。「さあ、わからないねえ、地図にもないんだもの。鉄の舟がおいであるねえ。」「あゝ。」「橋を架けるとこぢやないんでせうか。」女の子が云ひました。「あゝあれ工兵の旗だねえ。架橋演習をしてるんだ。けれど兵隊のかたちが見えないねえ。」

その時向ふ岸ちかくの少し下流の方で見えない天の川の水がぎらつと光つて柱のやうに高くはねあがりどおと烈しい音がしました。

「発破だよ、発破だよ。」カムパネルラはこおどりました。

その柱のやうになつた水は見えなくなり大きな鮭や鱒がきらつきらつと白く腹を光らせて空中に抛り出されて円い輪を描いてまた水に落ちました。ジョバンニはもうはねあがりたくいらぬ気持ちが軽くなつて云ひました。「空の工兵大隊だ。どうだ、鱒やなんかゞまるでこんなになつてはねあげられたねえ。僕こんな愉快な旅はしたことはない。いゝねえ。」「あの鱒なら近くで見たらこれくらいあるねえ、たくさんさかな居るんだな、この水の中に。」

「小さなお魚もゐるんでせうか。」女の子が談につり込まれて云

ひました。「居るんでせう。大きなのが居るんだから小さいのもあるんでせう。けれど遠くだからいま小さいの見えなかつたねえ。」ジヨバンニはもうすっかり機嫌が直つて面白さうにわらつて女の子に答へました。

「あれきつと双子のお星さまのお宮だよ。」男の子がいきなり窓「の」外をさして叫びました。

右手の低い丘の上に小さな水晶でもこさえたやうな二つのお宮がならんで立つてゐました。

「双子のお星さまのお宮つて何だい。」

「あたし前になんべんもお母さんから〔聴〕いたわ。ちゃんと小さな水晶のお宮で二つならんでゐるからきつとさうだわ。」

「はなしてごらん。双子のお星さまが何したつての。」

「ぼくも知ってらい。双〔子のお星さまが野原へ遊びにでてか
らすと喧嘩したんだらう。」「さうじゃないわよ。あのね、天の

川の岸にね、おつかさんお話なすつたわ、………。「」「それか
ら彗星がギーギーフーギーフーて云つ〔て〕来たねえ。」

「いやだわたあちゃんさうじゃないわよ。それはべつの方だわ。」

「するとあすこにいま笛を吹いて居るんだらうか。」「いま海へ
行つてらあ。」「いけないわよ。もう海からあがつてゐらつしや
つたのよ。」「さうさう。ぼく知つてらあ、ぼくおはなししやう
。」

川の向ふ岸が俄かに赤くなりました。楊の木や何かもまつ黒にすかし出され見えない天の川の波もときどきちらちら針のやうに赤く光りました。まったく向ふ岸の野原に大きなまつ赤な火が燃されその黒いけむりは高く桔梗いろのつめたさうな天をも焦がしさうでした。ルビーよりも赤くすきとほりリチウムよりもうつくしく酔ったやうになってその火は燃えてゐるのです。 「あれは何の火だらう。 あんな赤く光る火は何を燃やせばできるんだらう。」 ジョバンニが云ひました。 「蠍の火だな。」 カムパネルラが又地図と首つ引きして答へました。 「あら、蠍の火のことならあたし知ってるわ。」

「蠍の火って何だい。」 ジョバンニがききました。 「蠍がやけて

死んだのよ。その火がいまでも燃えてるってあたし何べんもお父さんから聴いたわ。」「蝸つて、虫だらう。」「え、蝸は虫よ。だけどい、虫だわ。」「蝸い、虫ぢやないよ。僕博物館でアルコールにつけてあるの見た。尾にこんなかぎがあつてそれで螫されると死ぬつて先生が云つたよ。」「さうよ。だけどい、虫だわ、お父さん斯う云つたのよ。むかしのバルドラの野原に一ぴきの蝸がゐて小さな虫やなんか殺してたべて生きてゐたんですつて。するとある日いたちに見附かつて食べられさうになつたんですつて。さそりは一生けん命遁げて遁げたけどたうたういたちを押へられさうになつたわ、そのときいきなり前に井戸があつてその中に落ちてしまつたわ、もうどうしてもあがられないでさそりは溺れは

じめたのよ。そのときさそりは斯う云ってお祈りしたといふの、あゝ、わたしはいままでいくつのものの命をとったかわからない、そしてその私がこんどいたちにとられやうとしたときはあんなに一生けん命にげた。それでもたうたうこんなになつてしまつた。あゝなんにもあてにならない。どうしてわたしはわたしのからだをだまつていたちに呉れてやらなかつたらう。そしたらいたちも一日生きのびたらうに。どうか神さま。私の心をごらん下さい。こんなにもむなしく命をすてずどうかこの次にはまことのみんなの幸のために私のからだをおつかひ下さい。つて云つたといふの。そしたらいつか蝸はじぶんのからだがまつ赤なうつくしい火になつて燃えてよるのやみを照らしてゐるのを見たつて。いまで

も燃えてるってお父さん仰ったわ。ほんたうにあの火それだわ。」
「さうだ。見たまへ。そこらの三角標はちやうどさそりの形にな
らんでゐるよ。」

ジヨバンニはまったくその大きな火の向ふに三つの三角標がちや
うどさそりの腕のやうにこつちに五つの三角標がさそりの尾やか
ぎのやうにならんでゐるのを見ました。そしてほ「ん」たうにそ
のまつ赤なうつくしいさそりの火は音なくあかるくあかるく燃え
たのです。

その火がだんだんうしろの方になるにつれてみんなは何とも云へ
ずにぎやかなさまざまの樂の音や草花の匂のやうなもの口笛や人
々のざわざわ云ふ声やらを聞きました。それはもうぢきちかくに

町か何かゞあつてそこにお祭でもあるといふやうな気がするのでした。

「ケンタウル露をふらせ。」いきなりいままで睡つてゐたジョバンニのとなりの男の子が向ふの窓を見ながら叫んでゐました。

あゝそこにはクリスマスストリーのやうにまつ青な唐檜かもみの木がたつてその中にはたくさんのたくさんの豆電燈がまるで千の蛍でも集つたやうについてゐました。

「あゝ、さうだ、今夜ケンタウル祭だねえ。」「あゝ、こゝはケンタウルの村だよ。」カムパネルラがすぐ云ひました。「以下原稿一枚？なし」

「ボール投げなら僕決してはづさない。」

男の子が大威張りで云ひました。

「もうぢきサウザンクロスです。おりる支度をして下さい。」青年がみんなに云ひました。

「僕も少し汽車へ乗ってるんだよ。」男の子が云ひました。カムパネルラのとりの女の子はそれはそれは立って支度をはじめましたけれどもやっぱりジョバンニたちとわかれたくないやうなやうすでした。

「こゝでおりなけあいけないのです。」青年はきちつと口を結んで男の子を見おろしながら云ひました。「厭だい。僕もう少し汽

車へ乗ってから行くんだい。」ジヨバンニがこらえ兼ねて云ひました。「僕たちと一諸に乗って行かう。僕たちどこまでだって行ける切符持つてるんだ。」「だけどあたしたちもうこゝで降りなけあいけないのよ。こゝ天上へ行くところなんだから。」女の子がさびしさうに云ひました。

「天上へなんか行かなくなつていゝぢやないか。ぼくたちこゝで天上よりもつといゝとこをこさえなけあいけないって僕の先生が云つたよ。」「だつておつ母さんも行ってらつしやるしそれに神さまが仰つしやるんだわ。」「そんな神さまうその神さまだい。」

。「あなたの神さまうその神さまよ。」「さうぢやないよ。」

「あなたの神さまってどんな神さま」ですか。「青年は笑ひな

がら云ひました。「ぼくほんたうはよく知りません、けれどもそんなんでなしにほんたうのたつた一人の神さまです。」「ほんたうの神さまはもちろんたつた一人です。」「あゝ、そんなんでなしにたつたひとりのほんたうの神さまです。」「だからさうぢやありませんか。わたくしはあなた方がいまにそのほんたうの神さまの前にわたくしたちとお会ひになることを祈ります。」青年はつゝましく両手を組みました。女の子もちやうどその通りにしました。みんなほんたうに別れが惜しさうでその顔いろも少し青ざめて見えました。ジヨバンニはあぶなく声をあげて泣き出さうとしました。

「さあもう仕度はいゝんですか。ぢきサウザンクロスですから。」

あゝそのときでした。見えない天の川のずうつと川下に青や橙やもうあらゆる光でちりばめられ□た十字架がまるで一本の木といふ風に川の中から立ってかゞやきその上には青じろい雲がまるい環になって后光のやうにかかつてゐるのでした。汽車の中がまるでざわざわしました。みんなあの北の十字のときのやうにまっすぐに立ってお祈りをはじめました。あつちにもこつちにも子供が瓜に飛びついたときのやうなよろこびの声や何とも云ひやうない深いつゝましいためいきの音ばかりきこえました。そしてだんだん十字架は窓の正面になりあの苹果の肉のやうな青じろい環の雲もゆるやかにゆるやかに繞つてゐるのが見えました。

「ハルレヤハルレヤ。」明るくたのしくみんなの声はひゞきみん

なはそのそらの遠くからつめたいそらの遠くからすきとほった何とも云へずさわやかなラツパの声をききました。そしてたくさんのシグナル「や」電燈の灯のなかを汽車はだんだんゆるやかになりたうたう十字架のちやうどま向ひに行つてすつかりとまりました。「さあ、下りるんですよ。」青年は男の子の手をひき姉妹たちは互にえりや肩を直してやつてだんだん向ふの出口の方へ歩き出しました。「ぢやさよなら。」女の子がふりかへつて二人に云ひました。「さよなら。」ジョバンニはまるで泣き出したいのをこらへて怒つたやうにぶつきり棒に云ひました。女の子はいかにもつらさうに眼を大きくしても一度こつちをふりかへつてそれからあとはもうだまつて出て行つてしまひました。汽車の中はもう

半分以上も空いてしまひ俄かにがらんとしてさびしくなり風がいつぱいに吹き込みました。

そして見てゐるとみんなはつゝましく列を組んであの十字架の前の天の川のなぎさにひざまづいてゐました。そしてその見えない天の川の水をわたつてひとりの神々しい白いきもの人が手をのばしてこつちへ来るのを二人は見ました。けれどもそのときはもう硝子の呼子は鳴らされ汽車はうごき出しと思ふうちに銀いろの霧が川下の方からすうつと流れて来てもうそつちは何も見えなくなりしました。たゞたくさんのくるみの木が葉をさんさんと光らしてその霧の中に立ち黄金の円光をもった電気栗鼠が可愛い顔をその中からちらちらのぞいてゐるだけでした。

そのときすうつと霧がはれかゝりました。どこかへ行く街道らしく小さな電燈の列に付いた通りがありました。それはしばらく線路に沿って進んでゐました。そして二人がそのあかしの前を通つて行くときはその小さな豆いろの火はちやうど挨拶でもするやうにほかつと消え二人が過ぎて行くときまた点くのでした。

ふりかへつて見るとさっきの十字架はすっかり小さくなつてしまひほんたうにもうそのまゝ胸にも吊されさうになり さっきの女の子や青年たちがその前の白い渚にまだひざまづいてゐるのかそれともどこか方角もわからないその天上へ行つたのかぼんやりして見分けられませんでした。

ジヨバンニは あゝ と深く息しました。「カムパネルラ、また僕たち二人きりになったねえ、どこまでもどこまでも一諸に行かう。僕はもうあのさそりのやうにほんたうにみんなの幸のためならば僕の中からだなんか百ペン灼いてもかまはない。」「うん。僕だつてさうだ。」カムパネルラの眼にはきれいな涙がうかんでありました。「けれどもほんたうのさいはひは一体何だらう。」ジヨバンニが云ひました。「僕わからない。」カムパネルラがぼんやり云ひました。

「僕たちしつかりやらうねえ。」ジヨバンニが胸いっぱい新らしい力が湧くやうにふうと息をしながら云ひました。

「あ、あすこ石炭袋だよ。その孔だよ。」カムパネルラが少し

そつちを避けるやうにしながら天の川のひととを指さしました。ジヨバンニはそつちを見てまるでぎくつとしてしまひました。天の川の一とこに大きなまつくらな孔がどほんとあいてゐるのです。その底がどれほど深いかその奥に何があるかいくら眼をこすつてのぞいてもなんにも見えずつゝ眼がしんしんと痛むのでした。ジヨバンニが云ひました。「僕もうあんな大きな暗の中だつてこわくない。きつとみんなのほんたうのさいはいをさがしに行く。どこまでもどこまでも僕たち一諸に進んで行かう。」「あゝきつと行くよ。あゝ、あすこの野原はなんてきれいだらう。みんな集つてるねえ。あすこがほんたうの天上なんだ。あつあすこにあるのぼくのお母さんだよ。」カムパネルラは俄かに窓の遠くに見える

きれいな野原を指して叫びました。

ジョバンニもそつちを見ましたけれどもそこはぼんやり白くけむつてゐるばかりどうしてもカムパネルラが云つたやうに思はれませんでした。何とも云へずさびしい気がしてぼんやりそつちを見てみましたら向ふの河岸に二本の電信ばしらが丁度両方から腕を組んだやうに赤い腕木をつらねて立つてゐました。「カムパネルラ、僕たち一諸に行かうねえ。」ジョバンニが斯う云ひながらふりかへつて見ましたらそのいままでカムパネルラの座つてゐた席にもうカムパネルラの形は見えず「ジョバンニはまるで鉄砲丸のやうに立ちあがりました。そして誰にも聞えないやうに窓の外へからだを乗り出して力いっぱいはげしく胸をうつて叫びそれか

らもう咽喉いっぱい泣きだしました。もうそこらが一ぺんにまっくらになつたやうに思ひました。□

ジヨバンニは眼をひらきました。もとの丘の草の中につかれてねむつてゐたのでした。胸は何だかおかしく熱り頬にはつめたい涙がながれてゐました。

ジヨバンニはばねのやうにはね起きました。町はすっかりさつき（通）りに下でたくさんの灯を綴つてはゐましたがその光はなんだかさつきよりは熟したといふ風でした。そしてたつたいま夢であるいた天の川もやっぱりさつきの通りに白くぼんやりかゝりまっ黒な南の地平線の上では殊にけむつたやうになつてその右

には蠍座の赤い星がうつくしくきらめき、そらぜんたいの位置はそんなに變つてもゐないやうでした。

ジヨバンニは一さんに丘を走つて下りました。まだ夕ごはんをたべないで待つてゐるお母さんのことが胸いっぱいに思ひだされたのです。どんどん黒い松の林の中を通つてそれからほの白い牧場の「柵」をまはつてさっきの入口から暗い牛舎の前へまた来ました。そこには誰かゞいま歸つたらしくさつきなかつた一つの車が何かの樽を二つ乗つけて置いてありました。

「今晚は、」ジヨバンニは叫びました。

「はい。」白い太いずぼんをはいた人がすぐ出て来て立ちました。

「何のご用ですか。」

「今日牛乳がぼくのところへ来なかつたのですが」

「あ済みませんでした。」その人はすぐ奥へ行つて一本の牛乳瓶をもつて来てジヨバンニに渡しながらまた云ひました。

「ほんたうに、済みませんでした。今日は「ひ」るすぎうっかりしてこうしの柵をあけて置いたもんですから大将早速親牛のところへ行つて半分ばかり吞んでしまひましてね……」その人はわらひました。

「さうですか。ではいたゞいて行きます。」「えゝ、どうも済みませんでした。」「いゝえ。」ジヨバンニはまだ熱い乳の瓶を両方のてのひらで「」包むやうにもつて牧場の柵を出ました。

そしてしばらく木のある町を通つて大通りへ出てまたしばらく行

きますとみちは十文字になってその右手の方通りのはづれにさつきカムパネルラたちのあかりを流しに行つた川へかゝつた大きな橋のやぐらが夜のそらにぼんやり立ってゐました。

ところがその十字になつた町かどや店の前に女たちが「七八人ぐらゐづつ集つて橋の方を見ながら何かひそひそ談してゐるのです。それから橋の上にもいろいろなあかりがいつぱいなのでした。ジョバンニはなぜかさあつと胸が冷たくなつたやうに思ひました。そしていきなり近くの人たちへ

「何かあつたんですか。」と叫ぶやうにきゝました。

「こどもが水へ落ちたんですよ。」一人が云ひますとその人たちは一斉にジョバンニの方を見ました。ジョバンニはまるで夢中で

橋の方へ走りました。橋の上は人でいっぱい、河が見えませんでした。白い服を着た巡査も出てみました。

ジョバンニは橋の袂から飛ぶやうに下の広い河原へおりました。その河原の水際に沿ってたくさんのあかりがせわしくのぼったり下ったりしてみました。向ふ岸の暗いどてにも火が七つ八つうごいてみました。そのまん中をもう烏瓜のあかりもない川が、わづかに音をたて、灰いろにしづかに流れてゐたのでした。

河原のいちばん下流の方へ洲のやうになって出たところに人の集りがくつきりまつ黒に立ってみました。ジョバンニはどんどんそつちへ走りました。するとジョバンニはいきなりさつきカムパネルラといっしょだったマルソ「に」会ひました。マルソがジョバ

ンニに走り寄ってきました。「ジヨバンニ、カムパネルラが川へはいったよ。」「どうして、いつ。」「ザネリがね、舟の上から烏うりのあかりを水の流れる方へ押しやろうとしたんだ。そのとき舟がゆれたもんだから水へ落っこつたらう。すると「カムパネルラ」がすぐ飛びこんだんだ。そしてザネリを舟の方へ押しよこした。ザネリはカトウにつかまった。けれどもあとカムパネルラが見えないんだ。」「みんな探してるんだらう。」「あゝすぐみんな来た。カムパネルラのお父さんも来た。けれども見附かないんだ。ザネリはうちへ連れられてった。」ジヨバンニはみんなの居るそっちの方へ行きました。そこに学生たち町の人たちが囲まれて青じろい尖ったあごをしたカムパネルラのお父さんが

黒い服を着てまっすぐに立って右手に持った時計をじつと見「つ」めてゐたのです。

みんなもぢつと河を見てゐました。誰も一言も物を云ふ人もありませんでした。ジヨバンニはわくわくわくわく足がふるえました。魚「を」とるときのアセチレンランプがたくさんせはしく行つたり来たりして黒い川の水はちらちら小さな波をたてゝ流れてゐるのが見えるのでした。

下流の方の川はゞ一ぱい銀河が巨きく写つてまるで水のないそのまゝのそらのやうに見えました。

ジヨバンニはそのカムパネルラはもうあの銀河のはづれにしかるないといふやうな気がしてしかたなかつたのです。

けれどもみんなはまだ、どこかの波の間から、

「ぼくずるぶん泳いだぞ。」と云ひながらカムパネルラが出て来るか或ひはカムパネルラがどこかの人の知らない洲にでも着いて立ってゐて誰かの来るのを待つてゐるかといふやうな気がして仕方ないらしいのでした。けれども俄かにカムパネルラのお父さんがきつぱり云ひました。

「もう駄目です。落ちてから四十五分たちましたから。」
ジヨバンニは思はずか「け」よつて博士の前に立つて、ぼくはカムパネルラの行つた方を知つてゐますぼくはカムパネルラといつしよに歩いてゐたのですと云はうとしましたがもうのどがつまつて何とも云へませんでした。すると博士はジヨバンニが挨拶に来

たとも思つたものですか　しばらくしげしげジョバンニを見て
ゐましたが

「あなたはジョバンニさんでしたね。どうも今晚はありがたう。」
と町ねいに云ひました。

ジョバンニは何も云へずにたゞおじぎをしました。

「あなたのお父さんはもう帰つてゐますか。」博士は堅く時計を
握つたまゝまたきゝました。

「いゝえ。」ジョバンニはかすかに頭をふりました。

「どうしたのかなあ、ぼくには一昨日大へん元気な便りがあつた
んだが。今日あ〔〕たりもう着くころなんだが。船が遅れたんだ
な。ジョバンニさん。あした放課後みなさんとうちへ遊びに来て

くださいね。」

さう云ひながら博士は「また川下の銀河のいっばいにうつた方へじつと眼を送りました。ジヨバンニはもういろいろなことでも胸がいっぱいでなんにも云へずに博士の前をはなれて早くお母さんに牛乳を持って行ってお父さんの帰ることを知らせやうと思ふともう一目散に河原を街の方へ走りました。」

青空文庫情報

底本：「【新】校本宮澤賢治全集 第十一巻 童話※「#ローマ
数字4、1-13-24」 本文篇」 筑摩書房

1996（平成8）年1月25日初版第1刷発行

※底本のテキストは、著者草稿によります。

※底本では校訂及び編者による説明を「〔 〕」、削除を「〔 〕」
で表示しています。

※「カムパネルラ」と「カンパネルラ」の混在は、底本通りです。

※底本は新字旧仮名づかいです。なお拗音、促音の小書きは、底
本通りです。

入力：砂場清隆

校正：北川松生

2016年6月10日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

銀河鉄道の夜

宮沢賢治

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>